

人間のふるさと メキシコ

渡会 純价



マヤ文化遺跡から (87)

10カ月余りのヨーロッパ生活を終えて、あわただしい一週間程のニューヨーク滞在から、フロリダのマイアミを経由し、メキシコのメリダに入ったのは1月も下旬であった。鉛色のパリの空からするとメリダは、正しく灼熱の太陽のもとにあった。試みに「今は夏か？」と尋ねると「いや、冬だ。夏はこれどころではない。」との返事。コート、上着を脱ぎワイシャツを捲りあげても汗は遠慮なく流れる。

メキシコ通の版画家深沢幸雄氏から紹介されたホテル・セベリアは、いかにも南国情緒をたたよわせる高い天井に、大きな3枚羽の扇風機が、けだるそうにのんびり回っている。ベッドの上には毛布はなく、シーツが2枚かかっており、寝る時は水のシャワーを浴びて、裸のままシーツとシーツの間にもぐるのだが、数分で身体はほてる。

早速、下着から着換えて半袖の軽装で、怪奇な魅力を漂わせる街並みを歩く。あやしい風体の男達もよく見ると、彫りの深い澄んだ瞳は素朴で人なつっこい。そして日本人に対する友好的な態度は、先のおののきを感じさせたニューヨークとは比べようもない。店の若く美しいセニョリータは、買物そっちのけで日本のことなど尋ねてきて、旅の心を和らげてくれる。私の訪れた世界の10カ国あまりのうち、最も毒されていない観光地(?)に思えた。

暑気ばらいに、名高いテキーラを呑もうとしたが、居

酒屋では出してくれない。大抵ビールで水替りによく呑んだ。それはカルタブランカという名で、日本のビールに似て美味かった。テキーラは上等なレストランかナイトクラブでなければならぬ。ソムブレロを深かぶかと手に塩をのせて呑む姿は一向にみかけなかった。レモンに似た小さく青い実を切って、それに塩をのせて呑むのが通例で、これが仲々いける。メキシコの滞在中は日課の楽しみとした。

ここを訪れた目的は、いわずもがな、偉大な古代マヤ文明の遺跡を尋ねるためである。マヤ文明が絢爛と開花したといわれるチチェンイツア、ウスマル、カパーなどを見る。圧巻は、神殿と宮殿からなる建造物とそこに施された象形文字等のレリーフである。特にレリーフ状のアラベスクは素晴らしく、しばし棒立ちになり模様を追う。これらの造形は、既に多くの画家が影響を受けていることは明らかである。4世紀頃、この創造力をもった人間の智慧を想いおこしながら、神殿のあるピラミッドに登った。けわしい階段は60度もあり、頂上に立った時は目が眩みそうになり、足元が震えてとまらなかった。広大な地に数多くの建造物が立ち並ぶ光景は、とても古代の人間のなせた業とは考えられなかった。

それにしても、千年以上も続いたマヤ文化は、どこえいってしまったのだろうか？ 土墾の家々から、手をさしのべて金を求める貧しいインディオに、その偉大な祖先の姿は見出せなかった。